



勝1課題で時間は4分で行った。

トップロープの部では4人中3人が、予選2本を完登する接戦になった。決勝は2人が同高度まで登り、最後はタイム差で新潟県の本間海成が1位になり3位には新潟県の齋藤律月が入った。

小学生中学生は、2名のエントリーで2名とも福井県の選手だった。2名とも決勝を完登してタイム差で1位木下陽菜、2位前田喜雨であった。

小学生高学年の部は8名の参加。本大会カテゴリーでも多い参加者で接戦が予想された。その中でも飛び抜けていたのが山形から参加の栗田知世で、予選2本完登、決勝も完登して1位となった。本人はボルダリングの方が得意と話していたが圧巻の登りだった。2位、3位はどちらも群馬県の選手が入り、4位に新潟フリークライミングクラブ所属の島田珀来が入った。島田は予選ではミスもあり6位であったが、決勝では

順位を上げ4位になった。新潟県の選手ではHUT WALL所属の池田粋が6位になった。池田はリードを始めたばかりだったが、思い切りの良い登りで頑張っていた。中学年女子は3名のエントリー。1位は群馬県の黒木もこで予選2本完登、決勝も高度を上げていったがスリッブしてフォールしたが、圧巻の登りであった。3位に新潟県HUT WALL所属の池田夏梨が入った。中学生女子の課題はグレードを高め設定されていてリードに慣れない池田には厳しい課題であった。

中学生男子の部は4名のエントリー。予選から接戦となり1位が2名、3位が2名となり4人で決勝を行い、決勝課題を3名が完登するというハイレベルな戦いとなった。

最終的にタイム差1秒で新潟フリークライミングクラブ所属の島田琥鉄が優勝した。新潟県の伊藤英規は、決勝課題を完登するも予選のカウント

バックで3位に入った。新潟県の参加選手が少なかったので県内ジムと連携して競技大会の認知など積極的

に広報して大会に参加してくれる選手の発掘等を行なっていかねければと感じた。

大会の次の日に合同練習会を開催した。講師に新潟県成年男子の田中修太、成年女子の栗田湖有を招き、リードを

メインに講習しました。講師の2人はともに日本代表としてリードワールドカップに出場していることもあり、日頃の練習内容や大会前の緊張のほぐし方などの質問を受けていた。練習会では他県の選手と話したり一緒にオプザベリ

たりと、いい刺激を受けて練習していた。

### 加盟団体の山行から 豊栄山岳会創立60周年記念山行 (鳥海山)

島 伸一

とき 令和4年7月23日(土)  
24日(日)  
メンバー 26人  
概要

豊栄山岳会の創立60周年の記念登山は鳥海山となった。酒田市の湯の台口コースから頂上の新山を目指す。天気予報では23日雨、24日曇りだったので心配していたが、24日の登山当日は晴れた。高砂観光の大型バスをチャーターし豊栄総合体育館

9時30分集合、10時出発。途中、「道の駅まほろば」、「道の駅しゃりん」などでトイレの駅を取りながら、小雨の中、山形県酒田市遊佐の鳥海山荘へ着く。風呂へ入って6時から懇親会。2時間ほどして各部屋に戻って就寝。翌日、4時頃に起きて外を見るも小雨。ピーピーという鳥の鳴き声がある。同室の大野さんがヨタカと教えてくれる。スマホのウエザーニュー

登山・ハイキング・クライミング  
テレマーク&山スキー



パーマーク  
長岡市西宮内2-97(長岡市役所裏通り)  
TEL0258(37)1200-FAX0258(33)1164  
●営業時間/AM10:30~PM8:00水曜定休

<http://www.parrmark.co.jp>



食に寄り添い、心を通わす。  
Alongside your cuisine and your life.

HAKKAISAN

[www.hakkaisan.co.jp](http://www.hakkaisan.co.jp)

スの雨雲予想では5時頃から雲が抜けて回復してくるようだ。部屋で支度して駐車場のバスへ。A隊のみ15人が先行する。B、C班は朝食後、各々時間をずらしてバスで移動の予定。

少し雨も当たり頂上は見えないが、道路わきのニッコウキスゲなどを見ながらバスで20分程走り、第2駐車場で降りる。アスファルト道路は、上の第1駐車場まで続いているが、そこではバスが回転できないので、ここから歩き。

支度してアスファルト道路を15分程歩いて第1駐車場

へ。途中白いノリウツギや赤いタニウツギの花が見えた。雪渓が道路そばに迫っていた所もある。第1駐車場の登山口にあるポストに計画書を入れて出発。ここで標高1,200m。先頭本田さん、しんがり中山さんの15人の大部隊だ。ゴツゴツした石や岩の登山道を歩いて行く。小川の渡渉もある。20分程で「滝ノ小屋」が見えてくる。この小

屋の裏の道を進んで雪渓に上がる。たくさんの花が見えてくる。青いシヤジンや白いタカネセンキュウ、クルマユリなど。だんだん列がばらけて長くなる。左手の八丁坂の方にニッコウキスゲやコバイケイソウの群落が見える。「河原宿小屋」に着き、ここまで

の歩きで頂上まで行けそうにないグループは、Aダツシュ班として本田さんがそのリーダーとなり伏拝岳を目指すことになる。女性5人がAダツシュ班になる。ここでオニギリの朝食。予定より30〜40分遅れている。

A班の先頭が中山さんとなり雪渓に入って登って行く。心字雪渓は長く、だんだん傾斜が急になってきて、途中でアイゼンを付ける。大雪渓、小雪渓と続く。中山さんと野口さんがグングン飛ばして歩いき、他の人とは相当間隔が開いた。小雪渓では夏スキーをしている男性が一人いた。大分遅れている人もいるので、中山、野口、坂本、島の

4人で、時間内に頂上を往復し、計画書の11時半に伏拝岳の昼食に間に合うようにと先を急ぐ。途中、無線で各班と連絡を取る。

稜線に着く、伏拝岳だ。何人か先客がいた。休まず、そのまま稜線を進んで行く。白いチョウカイフスマがあつた。ロープで囲ってあり、その近くにイワブクロも見えた。黒いチョウカイアザミも左右にたくさん見える。左手に頂上小屋の赤い屋根や新山の上で動く人も見えてくる。急傾斜を下る。雪渓を渡って小屋からの岩の道に接続し

て、ペンキの○や↓印を頼りに進む。上から降りてくる人も登る人もいる。岩の下をぐる所でちよつと道を間違えた。岩だらけでわかりにくい。上では男性が一人三脚で写真を撮っていた。周りは雲海だ。月山のみ雲海の上に見えた。吹浦口コース方面に残雪と青い鳥海湖が見える。男性にスマホでの記念写真をお願いする。ビデオも撮った。

下山の雪渓は急だったが、何とか稜線に登りつく。ここからは、すれ違う人に若い人が多い。高校生や大学生のような集団もいる。伏拝岳に着くと、Aダツシュ班が、もう羽賀さん手作りの「記念連ダコ」も揚げ終わり昼食も食べ終え、これから降りとの事。

追いかけて、雪渓の大分前で追いつく。高山植物の写真をスマホでたくさん撮る。白いヒナザクラ、ハクサンフウロなど。



雪渓ではガスが湧き、前が見えなくなったりした。ビデオも撮る。上は青空に絹のような雲が見えた。

「河原宿小屋」で一旦集合し、A班全員揃ったところで先へ進み、往路とは異なり、

渡渉を何回も繰り返す道をたどり、B、C班も集合していた「滝ノ小屋」に到着する。シゲさんの手作りの「祝60周年記念登山」の横断幕を手に持ち、全員での記念写真を撮る。



(滝ノ小屋にて)

バスに戻って鳥海山荘へ行き風呂に入らせてもらう。

帰りの車内では、一人一言の反省。「道の駅しゃりん」でトイレタイムがあったが、高速を使い予定より1時間半ほど早く体育館について解散した。

## 「欲ヶ池」に想う

峡彩山岳会

楡井 利幸

NHKにラジオ深夜便という番組がある。もう20年位も前のことだろうか。この番組に各地のリスナーが暮らしの様子や趣味のことなどを語るコーナーがあって、大阪の男性が「欲ヶ池」について熱い想いを語っていた。山仲間数人と下田の「欲ヶ池」を一目見たいと大阪から何回か探索に行くも未だ辿り着けず、また挑戦するつもりと語っていた。「欲ヶ池」という名前にひかれて、居ても立っても居られないとも語っていた。

私の岳兄で、峡彩山岳会々員の故川口辰栄氏もその時の放送を聞いていたと言っていた。「欲ヶ池」とはなんともしゃべりながら立ち上る地名である。欲の強い男が他人の宝物を盗み取ってバチがあたって、この池に沈んでいるのだろうか。

僕らもこの「欲ヶ池」に行ってみたく話をしていたから、このラジオ放送のことをよく覚えている。

この「欲ヶ池」は新潟県三条市の旧下田村と福島県只見町の県境にある中の又山(1070m)の西方約500m、標高950m地点にある小さな池だ。昭和60年ころ、五兵衛小屋や中の又山には行っていたが「欲ヶ池」のことは知らなかった。池の名前を知ったのは、三条市と合併前の下田村が平成2年7月に発行した「ただの山」という冊子についていた「下田山岳概略図」という地図からだ。この地図に載っていた「欲ヶ池」の地名を見て、大阪の人のように心が躍った時期があった。



とところが近年になって気づいたことだが、平成21年3月に発行した同じような冊子「ただの山」の「下田山塊山岳地図」には「欲ヶ池」が「中ノ又池」となっていた。国土

地理院の二万五千分の一地形図に池はあるが名称の記載はない。今春、三条市役所へ出向き担当者に昔日の地図を見せて、名称を元に戻すように依頼してきました。市の担当

者はずいぶん気がかりです。今年9月11日、登山禁止の看板がなくなっていると聞いて、仲間と光明山(879m)へ登ってきました。崩れた箇所は、その脇に新しい径ができていた。2ヶ所の古いトラバース径は敷に覆われているが、稜線に新しい径がつけられていて全体的に藪っばい

が特に問題はなかった。「輔の立て負い(ふいごのたておい)」も懐かしかった。下田の山はいいなあと改めて思い直した。

「欲ヶ池」は一般的には、大江ノ林道ノカワクルミ沢ノ日本平ノ五兵衛小屋のルートを行くが、残雪期にテントを背負って出かけたくなかった。あわよくば孤高の毛無山(1044m)にも立ってみたい。

(注) 国土地理院地形図では「中の又岳」となっているが、三条市の下田山塊山岳地図では「中ノ又岳」「中ノ又池」となっている。また、国土地理院地形図では「五兵衛小屋」が下田山塊山岳地図では「五兵衛小屋」をなっている。

# 2022 藤島蔵書研究会 研究報告会が開催される

令和4年11月17日(木)午後1時から表題の研究報告会が関川村・川北ふれあい自然の家において開催された。

この研究報告会は、平成27年6月25日、関川村に寄贈された藤島玄氏蔵書の整理が完了したことから、蔵書の一般公開に合わせてシンポジウムを開催したことが発端となり、以後継続して開催されてきた。

今年には4名の講師の方々から研究の成果が発表された。以下はその講演要旨です。

## 1. 「藤島玄と深田久弥 about」

講師 高辻 謙輔 氏

登山家であり小説家の深田久弥に高校生のころから興味をもち、60年以上調査研究をしてきた。その深田久弥の調査研究をどんな風にやってきたかを中心に話をしたい。

加賀市の深田久弥山の文化館を訪れた際に展示されていた1枚の歌詞カードが目にとまった。金沢刑務所の歌詞

カードで、久弥作詞の「希望の歌」が載っていた。東京中野区にある矯正会館にて、「月刊刑政」昭和25年7月号に深田久弥「格子なき牢獄」が所収されていることを見つけた。この一文に久弥が金沢刑務所を訪れたことが書かれていた。久弥は復員後、加賀市、金沢市に居住していた。その時に

金沢刑務所を訪問したことで作詞につながったのではないかと推察するに至った。確定的なことではないが、状況からして、この歌詞が作られたことの経緯が解明されたと思っている。

昭和43年7月25日の弥彦山

たいまつ登山祭で、弥彦山頂の御神廟前で藤島玄と深田久弥が写っている写真から、深田久弥がどこから来て、どこへ帰ったかを探索。種々の出版物から赤倉から柏崎、越後線に乗り換え弥彦へ、1泊してまた赤倉へ帰ったことが推測できた。資料を読み解くことで点が線となつて繋がった。

深田久弥と藤島玄は山を通

じ、いろいろと接点があったと思う。昭和37年8月の両家族での飯豊連峰縦走の写真、昭和63年4月の別冊「山と溪谷」の「学燈」(昭和40年8月号)の「学燈」(昭和40年8月号)に所収の深田久弥の「出羽三山」に2人で月山に登山、昭

和44年11月長岡市で開催された中村謙の出版記念祝賀会への2人の参加等が確認できる。蔵書の整理をしていて、所蔵品の中に多くの交際があったのに名刺が1枚も出てこなかったことが不思議だと思っ

## 2. 「飯豊連峰旧赤谷口登拝路」

講師 田邊 信行 氏

既に廃道となつてしまった飯豊連峰の赤谷登拝路について、藤島蔵書から主な記録を抽出して発表。

①赤谷口から飯豊連峰への登山道等の説明をした書物「山岳」、「越後山岳」、「越後の山旅」、「飯豊道」から6の記述を紹介。「西部より本山に至る最短なる唯一の道」、「会津口とは比較にならぬ細い登山道」、「この径の悪さは言語に絶して、悪絶無雙」、「大正3年磐越西線が開通、登拝者、登山者が会津口へ・・・湯ノ平温泉道は退廃の一途」等の記述がみられた。

②旧赤谷口の登拝路からの登

山記録を「山岳」、「飯豊」、「山のはなし他」、「飯豊道」から9の記述を紹介。明治36年8月の武田久吉の挑戦から、昭和24年7月の五十嵐篤雄らの登山までの道の整備されていない悪戦苦闘した往時の貴重な登山記録の紹介。

## 3. 「持倉鉱山の遺跡と藤島玄」

講師 小田 辰兵衛 氏

阿賀の里のツアーで、旧三川村五十島駅から約8km五十母川上流にある持倉鉱山のローマ時代の城を思わせる遺構を見学したことが、その歴史の調査のきっかけとなった。



(開会挨拶の平田大六代表)



(カラミレンガの遺構)

持倉鉦山は、明治草倉銅山や三川鉦山に比し知る人は少ないが、貴重な近代産業遺産、今年8月産業遺産学会の推薦産業遺産に認定された。

1750年ころから会津藩により採掘が始まった。明治38年5月、近代的採掘精錬が始まった。歴史は短く大正9年に閉山した。その間の歴史を詳細に説明した。鉦造りのカラミレンガの遺構は全国的に見ても珍しい。

藤島玄氏は持倉鉦山について、越後の山旅に記載はしているが、他の書物への記述は見当たらない。おそらく雪上を歩くことが多く、鉦山跡が雪の下となっていたことが一因で、興味をひかなかったのではないの

だろうか。

これからも藤島玄氏が残した文章がなにか調査していきたい。

4. 「大石口鉦立沢より

机差岳行 藤島玄

講師 佐久間 雅義 氏

昭和26年6月5日から7日にかけて、藤島玄、佐藤一栄、

山岸榮三郎、北村嘉助の4名が、関川村大石を出発し、大熊小屋1泊、鉦立沢から机差岳に登頂、大熊尾根を下りた。その模様を藤島ノートやアルバムからの写真を投影しながら、登山の模様を解説し

鉦立沢の雪渓登りの苦労や机差岳到着後、霧の中の残雪上の下山路の確定に慎重だったことなどを語った。装備の充実していない往時の登山の困難さを浮き彫りにした。

(遠藤俊一記)

図書紹介

「越後山岳 第十四号」

日本山岳会越後支部の機関紙 令和四年一〇月 発行



特集「越後の山の先人」では、大平晟、高頭仁兵衛、藤島玄、高波吾策、小野健の各氏の人物像や活動成果などについて、新たな視点で取り上げられている。

また、調査研究として、6人の執筆者が、山書の思い出、越後の古道踏査記録や飯豊連峰厳冬期主稜線縦走の系譜などについて発表している。

越後の山や先人達の関わりについて知るうえでぜひ読んでいただきたい書である。

頒布価格 二五〇〇円+送料実費 問合せ先 遠藤家之進正和さん

携帯電話

090-7240-6560

e-mail

ienoshin108@cooca.plala.or.jp

「絶景・世界の山歩き」

佐藤れい子著

(日本山岳会越後支部会員)

令和四年一月

新潟日報事業社 発行

定価 一七六〇円(税込)

本書は著者が二〇〇三年から二〇一九年にかけて登った世界の山々二一座の紀行文と写真で構成されている。世界の山々を目指す岳人にとって参考となる書である。

「高倉宮以仁王伝説の

会津と越後の山々」

山崎幸和著

(越後吉田山岳会会員)

令和四年一〇月

新潟日報メディアネット発売

定価 一九八〇円(税込)

平安時代末期の治承の乱で

近江の国にて負死した史実に拘らず、会津や越後に残る以仁王伝説を徹底調査。その

京から駿河、信濃、会津、越後への逃亡路を辿ったとともに著者の登山紀行が添えられている。

伝説と意思つつ読み進むうちに、この逃亡は史実ではないかと思わせる。この書を読んで会津、越後の国境の山々に纏わるロマンに思いを馳せてはどうでしょうか。



WEST  
OUTDOOR LIFE STORE

新潟 / 三条 / 長岡 / 上越

(鉦立沢 藤島アルバムより)

